



崑山集
卷



利5
1979



1979
1



崑山集叙

夫談諧之為義蓋賢臣諷諭之
婉辭而騷人吟詠之一體也所謂
戲言出於思者也豈不思哉故
廣記立於談諧部類苑分於談
諧類按詩衛風云善戲謔兮不
為虐辱兮此謂言語之間耳後人



因此演而為詩故有詼諧體諸
言體諸語體諸意體字謎體
禽言體雖含諷諭實則詼諧也
蓋皆以文滑稽爾是以本朝
歌詠亦有此一體也往昔子游
為武城宰時夫子聞絃歌之聲
莞爾而笑曰割雞焉用牛刀

此聖人之戲言也侏儒飽欲死臣朔
飢欲死此東方朔之詼諧也晏子
使楚楚主曰齊無大耶對曰齊
使賢者使賢王不肖者使不肖
王嬰不肖故使王耳此平仲之
滑稽也北齊使者訪東海徐陵
問其齒對曰小如來五歲大孔子

三年此徐陵之談諧也今吾

邦泰階承平四海無事士庶樂
利悉化無為既耽清戲華夷
靡然還初道人曰釣水逸事也
尚持生殺之柄奕棋清戲也且動
戰爭之心然則無戰爭之心無
生殺之柄燕閒清戲豈有以加

於此哉於是余大父有志撰
斯集然老毛老至而不堪倦勞
乃俾門生良德編輯之繙帙
則怡然歡心者與夫崑山連
壁玩弄而娛目者何以異哉
矣曰名之曰崑山集

慶安第四稔仲秋下浣講習

堂主人昌易謹叙

たゞそて代々の和歌集の中歌謡の歌
の連は連歌の中歌謡くもくわたり
終乃の理よわといはれあふ人
そのまゝしつりたるまゝて流れ
家代の歌くみほく終んと地ふん
乃よあし海をいふとわさるれ
あもひるひまふくもをいふ

中流あらしの秀句をゆく志めて好
 ぶ所ありいまり一巻ありて文
 質彬彬こころと書ひしう一有餘ふ
 足らざるよふ人とすしこをみえ約
 述とてよく發句ハ百句乃取られ
 之倭歌乃考以り唯一人て思ふ
 くとしさのひらんを好む
 くるんをきこに撰集あり作人
 一 百首めすそよらと志るんこ
 の考以りゆめしり時めさるんを
 みえて一なる次系極美の百首
 考頭乃歌女御入内之法扇風の
 歌の中めあつたるをいふ詞あり
 歌格もさあくるをいふ色ありと

極樂の淨刹母の品の差あわり
のめく乃代は此のゆめも難世
わらわたりたりしゆを侍りし後生
おそくく——家母長頼翁とりの家
此道乃中興を名とるはふそ
かきりりしゆのふ書は母のま

出る——早業のむく明るむくを
あつむと思ひ濟房とらゆりつと
うひんののからゆふけむを難
き石磨乃大まけしゆく——たる
のてゆめとい習うたあくとあつん
は瓶ちし法感とゆめんとお母あへ
くわつらしゆかふ子あつんとして
あふとすれと宋人の母あつし

ときさしめしり柳のすすみの
大薬波行る程に集まおたさ
句此他志あまのく人乃志まらや
るれおあふさふ今あけじらあ
ま取他志の次身夫より御神此
世志お何とまらり或は時節のお
後おしりして定めおりぬ他志乃
名字のさうりう事品名のふさ
まそ雄と野鶴とつふ乃謂と
号ふんそ此粉骨の云紫為と因
料わらそそ隙のんもがわあ象
とくうあうもつら此そくそあり
のそ此粉とふらるのたあ
しき句のうらふとあ後とわ

せんむらんお日月のまはると論と
しお心くらんまきくおと初まこ
し程さみすくおと、と申さ
るふく、富士の雪は時あつぬま
ちしふ子假名落字を介燈の
源乃まお、の海船あして民
ゆさ、おん、代子林、可、業、の
て此道もはらんそらん事とこひ
称ふまのち

時、れ、度、安、亭、卯、初、冬、野、夫、良、徳
あつ、侍、り

其山集卷之一 春部

元日付立書

今朝は東鑑のりら

右のやうに亞ねは

さし

年も人もそら初は

まのんまゝとれり

写す春うらつこ

年のく開ぬ梅やうる暦
くふくも練鼓若じとくは
大上言にうぬわらやあし者
く取まの何と擔ふそ三々日
じくじう餅とあらは此後亦
と事也うんは深くと合衆
車も本とウそくもちりけふの
くも候ハ年法はくもやたけん先
礼義とそくはりき業めははる
と此ぬかとはくくもやぬき
福の神とくふのそくわじの
くもまやうらうあせ二夜け
業徳ハ四方の處や引も相
穀のちと紙かうのあわらひ
と事纏はちとくもくもく
餅も流くくもく乃始のいも

くつこや徳万歳のともなはま
年まのちゆりくからお礼
表永のりふやま葉のり
あ水とせんそあけのり年
まのり此世たわじとほり縄

申乃ちふ

去年のりまはゆら目知な人海
あま子なりてまわりの年
開大豆のりあまじやじ
まのまそひまらまはり
年とむり一紙くまん
ちうくの葉たあまやじ

寛永十年か

寛永の十のりま門の松
ひくくま目いじまのり

酉乃ちふ

わら玉の年此うらやまうや
まらうとらうらうやうらう繩
力を沙の沖を遊具沙の今りの
らうけさまきそ布施や救珠
まらう年ハ人ほにらう目外
鷲目と長末おはらう八都うか
らうらうや花さかるとしよの
らう水のまらうらうらうは
知ら目のさうじうらうやうらうか
作保姫れ子綱らうらうしとらう年
道あらうて来らまらむのじよの
らうゆらうらうすいけらうらう年
之目母らうくハわら玉桂うけ
氷けらうらう際らうやうらうのま
年玉と流うんてらうやうらう年
う此矢のらうまらうらうらう
らう

物まうと引替り似たりうし此年
大少くも今朝ゆら雲の白葉
いぬとさう此中さうなるまやさうは
跡ふ雲も今朝うのくおいの
去年のいぬ迄おなるさうおと
作保娘の暮や暮の卦う此年
うしこ乃詞やふあんな今日のま
わらまらうしこのめらたあさ

年のゆくまうらけり日

作保娘と年子にうじつ夫の

実のうー元日ふ

冬此ののこそさうてらるる
尤そう三此中らとさうのう
雪方ふまきさうえみまこよ西東
年のゆく今朝うのまやまは
わらまらうらふらまやめら

門口の上ひけるまきや大くさり
いぬの子か目かけとこら此舞姫

午北うふ

くら妻のじまらるるうむらの松
春や実目おちるうとれりしの年
ちも本とまへいこひてれおと州
よのたこも四らや若書の手書梅
妻永の年北うらや福祿あ
年の流とほくや鏡の餅えとひ
信乃江の波あつらや松をわー

子北うふ

ゆくくふ詩とんぬのうー系
若輩よきまもや寒森のじの年
膳棚の、さうれあうや七ぬ三
大うくかじふ松枝のえ方外
うらひ若れ秋い天下れ試筆外

よんを福くけさうし記のよか

かのとれあさしふ

何のうれも統ひとすら今物

妻れ季とりら入るう雑家

年とらるとまよしとら天

あ海じら草むんまのけさ

ねさあかふらうあゆら

ちうくとりとらう南まう目仕金

ううらうとらあさしふ

ううの年の年まゆらあ

新志もんの堯の世代はく徳

子の年

あかあそと雷も今年此白

うしり

九年の一字福んのそと

氣晴てハ風新妻此期日

東西と妻の勢は家朝邦
しりらり又年の統は越そめ
位あまの年徳もなりきは妻
妻あまのふや善と大の志この
名水と汲入子楠の和國うま
名急ひと朝乃う流もあは
年玉ふかるととそそ来らるる
しりらりわたりりの名と二
年幾く後妻立けり日

作保娘の二子此元うまの妻
正月やうそ朝と流ら名急ひと
妻はうまおたかふそあはじの
めくまことらいつら清子み
芳名とらふ人お景と
すまはるるのうらら元
日ゆきとらとみ

九皇此のんも九歌この書
年徳の沖や一治りぬ満り
未成まこれ引付りし物
うらむ初もく一歳徳の望
年徳と初り初云い徳
年と月と初り初云い徳
うらむ初もく一歳徳の望
書初も万葉の忌と一三
心もやうも心月門の書
たぬらあけく天下此書
あつたてんかたは徳を
年号と初り初云い徳
右は阿野亞相の持りし

季吟

月 日 日

四方おも東南智多の徳の
幾ひけ居蘇酒くもん代此書
政位

十

一
さうはうー海千石とくふ

人年男さりのうら

名おあふも十部ハさうは年男

八百より代の初まやさうは

名おや京中くすん八子家

有らおあもじらんは是え和ん

りの水ハ養老の跡は流ふ

りーらあもわの水さくじ流ふ

紀州和方りん

りの水さくじ流ふ

養老はり

汲揚家よりさうはの井為水

有さく道生まのわかのま

年徳のひりろきやき門乃松

門あはれ勢や太史の噴ひ初

せんさりのあはれ太史の門乃松

新
玄樞

宗暉

政原

元与

梅盛

安之

吉也

梅平
海窓子

有さ
道原

有さ
初為

有さ
新

有さ
重治

情とくはく仔細此をまづつての書

益 笑安

冥中つらきつらきや背を心の松

大坂 安助

やめてまわ地をせん孫人の門

尾林 悦也

二葉のりふといふや門此を

素正 英正

あやかし門まやまの書

奥野 直昌

既沙つの大はりやうも衆

交三 如沈

門まふすじやそとひ筋縄

道永

ふたのこまのこまのこまのこま

盛新

ふまうりのりりりりりり

親重

ちちちちとさといひとらるる

法之

跡形おむくやうら此をりあ

良田

松も代も家ののりりのりり

良田

あふりけり

安道

くふ海を面もつらりる志もん

安道

年の末に教わのりやうらり

安道

春ふらうら松を沙門の傍に
春泉

志この繁い小を海月此の如
正知

之は奈そそと初大服よらる
政信

大服とらうらい母やんあく
以良

大服の奈やまのまこれ門の表
葉茂

古一歳の母

大ゆくや奈とまめらふ一じ
利政

母やまのぬ徳も三門の如
友宣

鶏とやら大服のちわが乃勢
友三

母やまのまうりあふれは果報
友重

松はくこの奈や大黒の袋造
友行

大服の奈れもも門乃まうら
友昌

大服もわくやらくく勢も炭
友治

勢もく書物はらわ一天下
幸以

子れら一母

志物や勢とまの勢此の海
保友

書初めはともかく一松の事

之初の文やんて此が家老

松原や志書と云幅の事此書

仕わとせと試筆此紙や出さか

うの年かゝる筆流も試筆

とららの時

年此致もみえ絶句の試筆

の試筆も試筆かゝる筆流の事

とららの時

雖故人すういふ地連あふ

甚おけきゝる鏡やりの道

玉粒菊うさ歎や粒小鏡餅

武士のうさ志海餅のりみ

年と粒くはるわ花の鏡餅

鏡餅より傳へてよまのれ

お目もあふ馬の鏡りり

約丹をり

室安

玉粒菊

政次

延命所

貞利

友

知是

友

右時

河野五井

法書

中務五井

當黒

梅山

祐良

書

保友

松原

道長

松原

一治

松原

常久

松原

正朝

松原

久野

右

右宣

天保元年閏正月朔日小

芝野の書

和らりとせりき 穉子とて

如法

年酌とて表立けり也

案也又餅花とて二夜の

良徳

夜明とて海内はさらの始也

元暁

大舞の御代とて穉子とて

良保

表来つとて是のまのりふ

幾成

せんといふまのりふの

書久

比るると餅のつとて

云々

穉子腹心所習のまの餅

如例

雜菜とてんじりて

重紀

と物いふと雜菜也とて

乞居

穉子とて穉菜のいふ

清之

大坂とて

四海を志しんらふ

如法

年を月も年も親と祝賀也

清治

元親
仁周
良徳
玄彦
友勝
利政
吉時

一系
貞利
日
政位
易定
吉成
政位
正頼

十七
小松系の巻

鳥居て頼天女とのち外
妻の季は流り季の好く
これきの好いをうと源氏酒
あはれあはれとまきしもの
新代の菊も志とれちり
定花とこのちりあすくは代
の巻

古田系の時

あはれあはれとまきしもの
利政

古田系の時

あはれあはれとまきしもの
賞英や果とくあらしの年
菊とこれ一正月れううか
菊のあはれ正月蓋の長と外
あはれあはれとまきしもの
三法と三湯あはれしりき外

同正月外

あはれあはれとまきしもの
中河 安治
中河 直治
中河 元信
中河 直治
仁徳系
益福系
心

美濃月守のしるし
馬を八つとてしるし
美濃月守のしるし
美濃月守のしるし
美濃月守のしるし
美濃月守のしるし
美濃月守のしるし
美濃月守のしるし
美濃月守のしるし
美濃月守のしるし

保友
正成
正成
正成
正成
正成
正成
正成
正成
正成

美濃月守

美濃月守のしるし
美濃月守のしるし
美濃月守のしるし
美濃月守のしるし
美濃月守のしるし
美濃月守のしるし
美濃月守のしるし
美濃月守のしるし
美濃月守のしるし
美濃月守のしるし

保友
正成
正成
正成
正成
正成
正成
正成
正成
正成

かゝの酒いへん 蓬萊さんつ日

十六

終冠サ

良寛

九歳の時

尚舞いあけけし小新ひるま

温存長新凡

安清

まおつ目やこゝのくす舞

了舞

久新

己卯のりー母

ほら此あうまく此妻也新舞

斤柄

玄担

弓姫子年此ほらととら目外

位

良保

よらまひの儀武や業此う好

政伝

うら物ら小舞そすくおら好

温存長新凡

同

とまよゆら小矢とらけ刻の

安清

寅のりー母

虎とみくいとこ也あう弓好

中務

貞宣

年の額まそそおけお好

左務

尚書

あつらんと増ふ心のうこ好

中務

貞宣

うこ好の好やとらつて好

新長官

季貞

はらん天下そと教も松拍子

左務勅

如貞

小治の巻もあつたその松柳子

新も次つとせしむくと松花也

あまのぬのそやうりわの中云

子れう一正月さるあり

ころふ

正月とさねのう此雲系

と初らるや大日女へ世の年

田代さうそまほとらんまの乳

伴海蝦やいふふ大流の牛此年

とららまをや案又の牛の年

うらひまの節も山治此牛此年

わららるらるの虎らりあり一牛の

佐保也や長志此嫁うの年

かさつこのひやあ森物や寅の

かきん所あかんふすじも虎の

ひのとれまの年也

豊後佐々木

卜傳

菅柳

正堂

本村也

宗之

同音

作失念

同音

貞長

貞友

海平

ふね

感庸

如方

政重

津

如貞

友

存時

森

右行

因

年幾くまをける時

わら玉の枝もいもんまを此書

舞高

正友

わら玉也西向ふ背月空方のま

子多

正成

わら玉也すり出ると年の暦

馬屋

正平

其をまめおりて

仁多礼智とんちあんかろう其

神在

正貞

年の結や世々りえんて

常

正得

海をいやく

くまおりの日から終年此と

壽

正延

まふりの結くすけ終のあ

終

正約

まふりよけさのつくとたふら

終

正安

おさうらひあまのほつ終のあ

終

正三

異国をそのまも終年也終の

終

正定

天下の六年もよりと終

終

正利

國をあんのんなりと出るま

終

正之

あまのまもるあまの終

終

正海

大晦のまをまゝるり

まのふらりまふらりまもははは脚

年號つりてのま

ふらんのことい古流りま

七歳乃時

あらん七のゆるりあはれま

又

まのまのまのまのまのま

八葉のまありり

人をまのまのまのまのま

七歳乃時

比叡のまのまのまのま

まのまのまのまのまのま

まのまのまのまのまのま

まのまのまのまのまのま

まのまのまのまのまのま

まのまのま

友勝

まのま

貞利

まのま

又

まのま

安清

まのま

清友

まのま

正徳

まのま

貞好

まのま

羽津の邦彦子軍之民の妻

徳冠并

良徳

わらわあふ輪王此代の妻の夫

長瀬

おまつりあふまじや海小田方ぬ

月

と新州あふふつ宮方とつたて

〃

冠のあつ紙とじつお質の邦

〃

歳徳も来りまじや所同即

〃

あつまきそなんかも様は西家徳

〃

ありたつて獨らつらあつて

〃

美物のあつあま目やあま質珠

〃

妻とくふ東方よりあつせん

〃

あつげを教もまじやあつ目計

〃

門の松葉やあつあ代の教

〃

作保外も子紙とあつあ代

〃

と年よりあつあ書の内もあつ

〃

大船の景とあつあ年いさあつ

〃

年あつてあま此あつあ元

日

冬と春此中めく世へは

せうくは宿りせんけさの妻

世とめ榎もやりなれと

榎もやりまは八子代の物

つめらまらめまきあくは

寛永年中楊弓とらわ

里つら八子の元日実る

利なれと

楊弓と春さくさくは実の目

さくさくはさくさくは実の目

今年めくさくさくは実の目

いのかたがさくさくは実の目

さくさくはさくさくは実の目

寛十三元日の餅

異名非あくせんまは日非

正得さくさくは実の餅

寛十郎冬とついでに此所黨
を討つとついでに所女を討つ
と御征伐のこゝ軍兵を
遣はさるゝ明和元年

元日也

在次身うす書きやとくは書

書やうとれい

天の指もたききりついでに雪

餅の人の蝦と腰のうらさ
けさく人らかんよららむら
腹中ゆほむ年玉やうら
大服のうらやんのうら
世乃人の鑑とふらとら
雪と森は花とふらやう
鳥報も梅葉とさるは代
正月の礼志うらむら

七十七

と新くはたしや流しれ歳
新くはたしや流しれ歳
大黒のころも流しれ歳
毒もあふむくころも流しれ歳
鳳凰もあふむくころも流しれ歳
元日さふちりやわん

節もあつたころも流しれ歳
さつり養おみ屋もあつし
侍りあふむくころも流しれ歳

わしまあふむくころも流しれ歳
飢饉しけふ年

ころの縁もあつたころも流しれ歳
まららひの日

つらつらや赤子に中もあつた歳
まのふもあつたころも流しれ歳
お糸のふれ橋を

くらわらうきや寝るの傍程

あふてまの和あかんのわき

うらむらと面白き連芳成

砂と数あつとまよゆこの指爪

まゆらのおほら花は風

みよとまけつらつ海と

元三の子城は海あひの神外

船の果報はくお子板のえ坊

あふてまの和あかんのわき

去年命約色けきい尚

あふてまの和あかんのわき

あふてまの和あかんのわき

あふてまの和あかんのわき

あふてまの和あかんのわき

あふてまの和あかんのわき

あふてまの和あかんのわき

いましらじふ家の首ぬ

ちこそあふらうてすん

と説く

家の風富をせん孫の婚

腕月とふら物いほはたか

海光のそふや孫の婚

榎打子板

ゆりくしてとゆりくもこた

遊川まらりむらりての流

はくそ孫の婚むらりての

子曰

まは日の大あくむて孫の婚

男松女去野や川せてぬの

まふひけるふらのまきん

まのゆやまもふたひの松

ふららも榎のひよむの松

十六

〃 〃 〃

伊川 室津

橋下 常事

室津

摘みかきしるふとさきわくを

ふせもほひまうかひ下女のら

せらるる唐土のきりたまりふ

源氏あそび下中あそびあそ

新あそびはきりたまりふ

くさるる八十一節よりか

とえおくりあそびあそびの者か

浴衣あそびあそびあそびの者

あそびあそびあそびあそび

あそびあそびあそびあそび

あそびあそびあそびあそび

あそびあそびあそびあそび

狂言師の者か

あそびあそびあそびあそび

あそびあそびあそびあそび

あそびあそびあそびあそび

くららに賤う池りしものうふ
 たらさへ怒らあう終る此繪を茶
 少り賣いりふ終るさう此繪を茶
 此をたさ入ふら梅のよりれ外
 聖あをるわんさしをう佛の在
 佛の在流しわ九品の蓮葉
 花くさうふ終るうたきこわ外聖

一
 一把をうきりう人ぬれうらひに
 野母さこらう終るうゆ人の茶葉
 増あううふらう一終るうらひに
 流まんを人集んりらう茶葉
 七らさう茶の葉うぬくさう外
 流るうさもさうもはらうらう茶葉
 くららにたらさいぬくぬく
 くららにたらさいぬくぬく

季吟

一對おらるもはく下りまきなり

そも流るは清華流と名寄る

まろくもまの野ゆきらわら

あもくもくまのたのまか

あまのまのまらも勝子に勝棚

むらくもくまのまらもくまの

はくけのまのまらに勝るま

はく雪の流るもはくまのま

質をゆめて

宿のまのまらもはくま

らくまのまらもはくま

はくまのまらもはくま

春風の中まらもはくま

くたらのまらもはくま

ま目野の中まらもはくま

まのまのまらもはくま

月

月

好道

正次

方宣

香威

保友

貞則

まら

正武

一人

まら

英長

好道

貞次

くんや酸み百八十セリらこたな

セリらやうりそ八檄錫教の手

縁まのちこのあくの初る茶本

雪江うも橋と懸増あくら外

淡沃の芥しむけの根深くか

このうもあかりのたかく根新

ぬまをほじ根芥いうくのひと新

そわかして根をぬむくやまのそ

大地くくくらきうらうらるる

ほじ人のらぬかふたをる外

根その葉をひすらのあまもたうり

本火入全まといゆかすらのあまも

ほらわひく粒じやるあゆ佛は産

物落やあのかくたうく佛の産

右右のまてほじや合掌佛は産

い川前くま松の粒を佛の産

右尉

長次

重紀

貞利

龜丸

會秀

定利

清之

酒石

正純

一男

宗時

保友

貞利

定時

廿六

けりわひの貪欲をりし佛の性 并 正友

おぼけは次身ふきし佛の性 暴 正統

まり割じおそり不細かきけのき おぼけ 宗利

ふむの野も此脇の佛の性 尚 正竹

七種やふきし七仏の佛の性 在在柱 正徳

蓮のふみれ野も花らり佛の性 了安寺 正徳

佛の性天より種やまきこく 母田 正勝

ふみれらりき射めあそん 川村 正言

勢せぬら学も業もや 川村 正言

ふききく射てもそむ 一明 正言

そりあ人の為業もや 正言 正言

おぼけ 正言 正言

為業はしむ 正言 正言

餌みす 正言 正言

島そ 正言 正言

秋と 正言 正言

夜もあつても人も泣くも泣くも草

貴人よりも山神も泣くも草

神もあつても神も泣くも草

くも泣くも草も泣くも草

福もあつても福も泣くも草

泣くも泣くも泣くも泣くも草

脚守あつても泣くも泣くも草

客のあつても泣くも泣くも草

泣くも泣くも泣くも泣くも草

人々も泣くも泣くも泣くも草

くも泣くも泣くも泣くも草

白馬節書

終もあつても泣くも泣くも草

懸想文

けいもあつても泣くも泣くも草

草

林

高

高

高

高

高

高

高

高

高

高

高

高

高

草

林

高

高

高

高

高

高

高

高

高

高

高

高

子妻万歳

吾の甲は昔も万歳のよと夜

勢

一治

貴初也中山恩海亦東北町

玉音寺

政次

因今もあつてもかうも

豊

安助

初寅

初より此川縁をまわらへ

杉川

村政

初よりわびたうと人あはれ

吉城

とつちのつらうとつちのつらう

吉城

縁

とつちのつらうとつちのつらう

年

易定

踏歌

少つちのつらうとつちのつらう

芳流

おつ

たき長

氏のつらうとつちのつらう

サラス

坊えまのつらうとつちのつらう

たき長のつらうとつちのつらう

三十九

やきちるふ海とつた長長此を
み長く明りふらわらさき
さ記らわらも清く此海を為る
手柄 良次
蓄 友直
蓄 貞利

儲り

けうらの養れらふや清とじ
まのふらふふのうきやら月
備 政信
兼永 正誠

貞豆餅

おちのちのちを豆餅のち餅

穂くらん貞豆餅此餅のち

あつひく移入半人貞豆餅
中務 貞直

たのんこの中へや今来り
円

る豆餅とる柄とるのから
雲守 政次

痛てらるや柄とる此を豆餅
結政

産

并ふもふらわらふの夜川
去風めくす此神やうとまら

雲方山あけりあしきうん
世とひろま天井とくろの
山をつと海よとすうん
ちきまうらやふくも
踏めくう目れあしあ
天のそれれ布るれやま

三編あし

ふまのそれれあしあ
鉄拐りこいあし

ちく息の鉄拐りみひのま
仁和寺の山れあしあ
あしれはのあけのあし
ま目好うあしあ
あしあしあしあ
あしあしあしあ
あしあしあしあ
あしあしあしあ

川神と珠のつゝ縄やま露
ひきく川霧や心のうら風
まは日やひさしのまゆ此露酒
作保娘の九花の娘のつま
うら山と根川ぬあうらうら
風のまてはまかこはれり
鷹合やあはまぬの標乃こい
花盛つゝまぬいまうらうら

山と花柳のうら露のうら
ぬうらうらと新あはれ病
花のまてはまかこはれり
本橋山やうらうらとあはれ
身泥の雲のたまのうら霧
山をぬくまふけしゆうら
花山の歌とまふけしゆうら
山と山の頭や額川の横霧

反方 元貞
右取 高秀
三玉 英辰
存 善記
抱山 保友

一
樂波りそなりのとこ

山たけの麓もむくも大はくむ

山まきこ治通するも八重を

ま露けけ地もれや床のやま

とて山ゆそる麓也地獄網

とて山ゆそる麓の町

とて山ゆそる麓の町

とて山ゆそる麓の町

とて山ゆそる麓の町

とて山ゆそる麓の町

とて山ゆそる麓の町

とて山ゆそる麓の町

とて山ゆそる麓の町

とて山ゆそる麓の町

とて山ゆそる麓の町

とて山ゆそる麓の町

奇

中

中

中

中

中

中

中

中

中

中

中

中

中

中

中

柳也

重

重

政辰

一井

保友

保友

月

政辰

保友

一井

重

重

生いやすふに此あまこい

んこあまこいあまこいあまこい

あまこいあまこいあまこいあまこい

あまこいあまこいあまこいあまこい

あまこいあまこいあまこいあまこい

あまこいあまこいあまこいあまこい

あまこいあまこいあまこいあまこい

あまこいあまこいあまこいあまこい

あまこいあまこいあまこいあまこい

あまこいあまこいあまこいあまこい

あまこいあまこいあまこいあまこい

あまこいあまこいあまこいあまこい

あまこいあまこいあまこいあまこい

あまこいあまこいあまこいあまこい

あまこいあまこいあまこいあまこい

あまこいあまこいあまこいあまこい

流及

一入

威成

政信

貞利

友我

ふ好

与利

作英

宗行

貞吉

一男

友我

政信

宗孝

号此ふを法花經の花中留 式

十二迴忌遊音

初持系斤相ふうくひまの法華經
号如新知根名よりまき此法花宗
良保 西的

八掃と

号此ふを八まん法華經
号の雅然あまも花の中
号乃かまも法華經人法華
如貝 友我 安那

飛山の号此雅ハ可部毛津が
右時

号のまもまん法花の初名桃山
正泰

うくひま此花やお雅の箱柳
保友

号を梅と雅よかん雅政寺
月

うくひまの雅よく持くまの院
安那

南都知方ちあくと

号此ふを法花經さうくひ
安那 正泰
安那 正泰

了年号

ふらの花はあつしくちやいさけ

夕霧

うらひまのあわむをいさげ

利政

まはり本むむのあはれりく枝

貞好

静ゆふたふちうらひすり

春葉

あつあつてうけやあつあつの中

貞実

あつあつあつあつあつあつあつ

元貞

うらひまのあつあつあつあつあつ

云次

うらひまのあつあつあつあつあつ

卜傳

あつあつあつあつあつあつあつ

後作

あつあつあつあつあつあつあつ

保友

あつあつあつあつあつあつあつ

安助

あつあつあつあつあつあつあつ

正宅

あつあつあつあつあつあつあつ

友宣

あつあつあつあつあつあつあつ

政重

うらひと梅の比翼連理系 一弁
 雪のほろしをみよのち梅を系 友我
 紅梅もや招酒の金衣系 梅盛
 龍を花もやとらも金衣系 千貞
 うす雪ふ上もも志う系 儀經
 教ちくわうかうふり金衣系 乞房
 帝のとらうんらん系 貞利
 雪の梅の蒼やう系 長頼

うらひと梅の比翼連理系 一弁
 雪のほろしをみよのち梅を系 友我
 紅梅もや招酒の金衣系 梅盛
 龍を花もやとらも金衣系 千貞
 うす雪ふ上もも志う系 儀經
 教ちくわうかうふり金衣系 乞房
 帝のとらうんらん系 貞利
 雪の梅の蒼やう系 長頼
 うらひと梅の比翼連理系 一弁
 雪のほろしをみよのち梅を系 友我
 紅梅もや招酒の金衣系 梅盛
 龍を花もやとらも金衣系 千貞
 うす雪ふ上もも志う系 儀經
 教ちくわうかうふり金衣系 乞房
 帝のとらうんらん系 貞利
 雪の梅の蒼やう系 長頼

雪の如目のもや富士の境

梅

雪の如くあはれしものゆゑ梅の花
 ことばに梅の花の目乃葉
 名もあひく人のおと梅の花
 わるる花洗のまらるる梅の花
 梅の花のちとしめくまらるる
 木の母とあひつひ初く花は
 雪の物はの初くく梅の花
 鼻の元じりあまらるる白ひ
 毒の毒とあまらるるもせ花の園
 梅のえの面へさるる日差の
 梅の花を初くまらるる
 雪の梅のあまらるる目貫か
 毒の毒とあまらるる柳のこころ
 梅の花を初くまらるる白ひか

うらひの秋のこゝろやその梅
 春風のりとお梅のうらひ
 花の中此ゆらぎしるの梅
 春の因うそくは梅の本は芽は
 新近三梅の香のくやうらひ
 乃并女の毒の物作の白ひ
 梅の枝やうかう十文字
 うらひの粉砕の秋の梅の心
 一箇めあきうらひのうらひ

自身書

梅の毒や花遊人の自身書
 香気余亦人や梅のすまの風
 春梅の風の香気とさうらひ
 少りはり雪や梅枝の香包
 めくめらう一書梅の梅乃花
 梅の毒のうらひのうらひ

南枝より北枝まで梅の影を
 咲花の身は緑の影を梅のま
 め折てわじりやり梅の影を
 梅も今思ふ香らんと由や此を
 信初く白ふや梅の影を此
 縁木ありて信やまら子此花の先
 すうかてとじりて此花の影を
 ちりて此花の影を此花の影
 の影を此花の影を此花の影
 号の影を此花の影を此花の影
 一花の影を此花の影を此花の影
 梅の影を此花の影を此花の影
 毒もちやうく人を此花の影
 木の影を此花の影を此花の影
 目らうよと今も此花の影を
 此花の影を此花の影を此花の影

やう梅のやうにおとめひのたの歌
咲けの梅の二子のたのおふ
ゆきと花のや梅のすす枝
まじりも花のまんやう
やう梅の花のや一具うり
美あをを枝の梅のすやう

謡曲

吹風うけてしきこの梅の枝

雪のく咲ぬ毒やうあり

うけい霞や梅の是の家

やう梅の園も月夜は白ひか

花梅や日をたうりや雪を

びと若い大糸の梅の枝

あつめや他程のたか梅の

大糸の咲やうと梅のうか

季吟

曰

常

乞乞尾別名續屋伊波
 一葉具七葉うそ六酒所
 林母まふて人この中そ
 けふふりりーわくは
 林の臺形のそこのみん
 物も似る梅の形と物
 七折しそをせぬふと又
 是のそこの院むきまりあり

つらしゆとゆのひせくそ

人おのあ〜とこそ

梅すきや誰もさ〜この花の
 花柄と誰りそ人おさ〜
 梅の文は花の匂ひやさ〜
 そ〜とりてさるは枝もあは梅
 草の秋袋らとやあかき毒
 常れとほくふ梅のほか〜

若物西を具九歳 正治
 十歳 長次
 二歳具十二歳 良富
 七歳 八歳
 名續屋 友交
 而林登運守 正信

國守

梅はからこれ湯まのころりか

政次

はかの花はそくい梅乃すまふか

久保

みる目らむなるんりやむじあか

助喜

多と香と目と鼻うて梅花

勝明

じ然とつふや先ころりかゆんを

玄哉

じあれよとさか筋とわらかゆりか

室後

梅の香とわんのりりか花わつら

室孝

うけつじきや霞面忘の毒

俊宗

八重むえ咲や九箇の忘梅

俊彦

忘の梅や入らじ枝を浮子骨

政方

あけあハ梅花やうら大馬

長時

同一國かきりし時

おろろりとも香のし紅梅田外

貞利

香とくし梅とくふ香やふん

毎定

三崎の神やかきり此朝の毒

俊秀

梅もらや利生もすくな花ん

長原

若梅の花や少好くうまん深

蓮色

又と好む本かいらえさけ花は翁

月

きと花を好む又本方れあつ此亦

毎延

梅のあきらおてい腰かさくは

在務

花れけすあやう梅の枝

改位

を豆あくとをさよあひは梅を

心也

よせ流さるる余の格と梅の花は

良勝

やう梅くやそ花よ梅の花の掛

在乃

け垂いぬ一梅花の繪簪式

正伯

玉洞の扇りうしは編方毒

感融

細切乃正月やさく編方梅

玄利

年此頭くさきにはけ編方梅

保友

常のうさもや御製編方毒

伊人

皇子も難波のまは花の元

乃花

難波女の花乃あひのこもさくわ

浦 室和

ちやくとくとももよりむきむれ先

浦 浅成

はきれつる其れもあの花乃先

松平 侍牛

あ花と縁をいひこの花乃先

松平 長色

花乃先亦風のおさめやふり此

喜 守林

あしれを今もあやくも花乃先

中務 伝云

そー乃あわ目星あふくさる花乃

徳山 貞吉

星々ら此梅乃花や松平袋

保左

梅乃さくわさくさく此花の梅

右衛門

あ花乃八風日り毒り此

由尚

花とさく目とさくさく梅磨

清玄

右磨とすんを梅乃花さくん

之吉

むくくわわあめさく梅磨

菅林

うらひとさくさく梅本梅磨

一助

ち年かどらんむさく梅磨

池田

梅と生そがらひさくあひ

一角

物はあつらひ梅はたつたのさかひ

あつたあつたあつたあつたあつた

風は清く

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

お梅やお近乃ちまうをれ小種
数百年の経毒やまこれまき人
御り梅ハ大名所の地何うか

梅乃枝のゆをきらうと物そ

りよとこえ

おのけけりやう梅乃ちえん外

御り梅のちえんやけがこころ

敷の甲中吟や種梅田方所

御り梅のちえんやけがこころ

やう毒おれらうあや月乃ら

風乃ちくちもれ梅や唄おねた

たら梅のんらうお初危難的奇

全名をよ伊とこらや梅法所

筆のたるるやうも毒法所

あや〜〜〜たもさのよひ梅法所

先ちやうの病おれんさけ梅のむ

微塵のうらむしきまをくも八津の
春梅の曲るも花のてき此勢
梅淡花も中らうも花のあら
津の川や春梅らうも花の盛
〃 〃 〃 〃

春水付去来水考

とけて又しきふ水もぬえん
おとけく凍と水も中らうり
月乃脚の水の起るも踏らうり

谷河ぬおるもささのささり
春も水のおもくもぬ水水
氷消く舞も流るもささり
春の日のあさうもくも水水
春のくちもささりぬ水水
時よりてまの水のけりつ那
さうらも流るもささり水水
春うにさけぬ水もさの考

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

高 正 良 明
高 正 良 明
高 正 良 明
高 正 良 明

とる

火の平と結してもしけぬ水
何れも此水は流さく目新ふ
能く井かきせ水のたまり
新乃流すおそけ新わりの流
新の流すわりのわりの産湯
新の流すわりのわりの産湯
新の流すわりのわりの産湯

新の流すわりのわりの産湯
新の流すわりのわりの産湯
新の流すわりのわりの産湯

正知
忠務
忠昌
忠治
貞房

春雷

一樹乃雷流く一河のちん水
まゆの流す雷も一樹のけり
餅雷のりし流すれまゆのちん水
妙な雷は花流す人のまゆのちん水
あつらひのわくやわくわくまゆのちん水
あつらひのわくわくまゆのちん水
風あつらひのわくわくまゆのちん水

深居
持保
友我
保友
正力
俊秀
貞利

音

勅使の跡の池をみればさう書

音

字のまらやあれ中なるまのの

音

音

花を根ゆるりおのりし雪

音

音

湯気そそきかきあつく書

音

音

いさなり此書風のちり雪

音

音

二月のまも出りり書

音

音

條をこしれ老鳥の葉よ書

音

音

けりたは日やあたらん書

音

音

清ゆくい大室の門の雪

音

音

雪佛清くのほや虚を

音

音

清くほや清ま海を

音

音

母の追を

清て雪母や佛か南を

音

音

おそけて流きやるる書

音

音

おせりる下紐じとわ書

音

音

字八

春霧

長き日の霧は細かき白んを

曇

後活

新詠

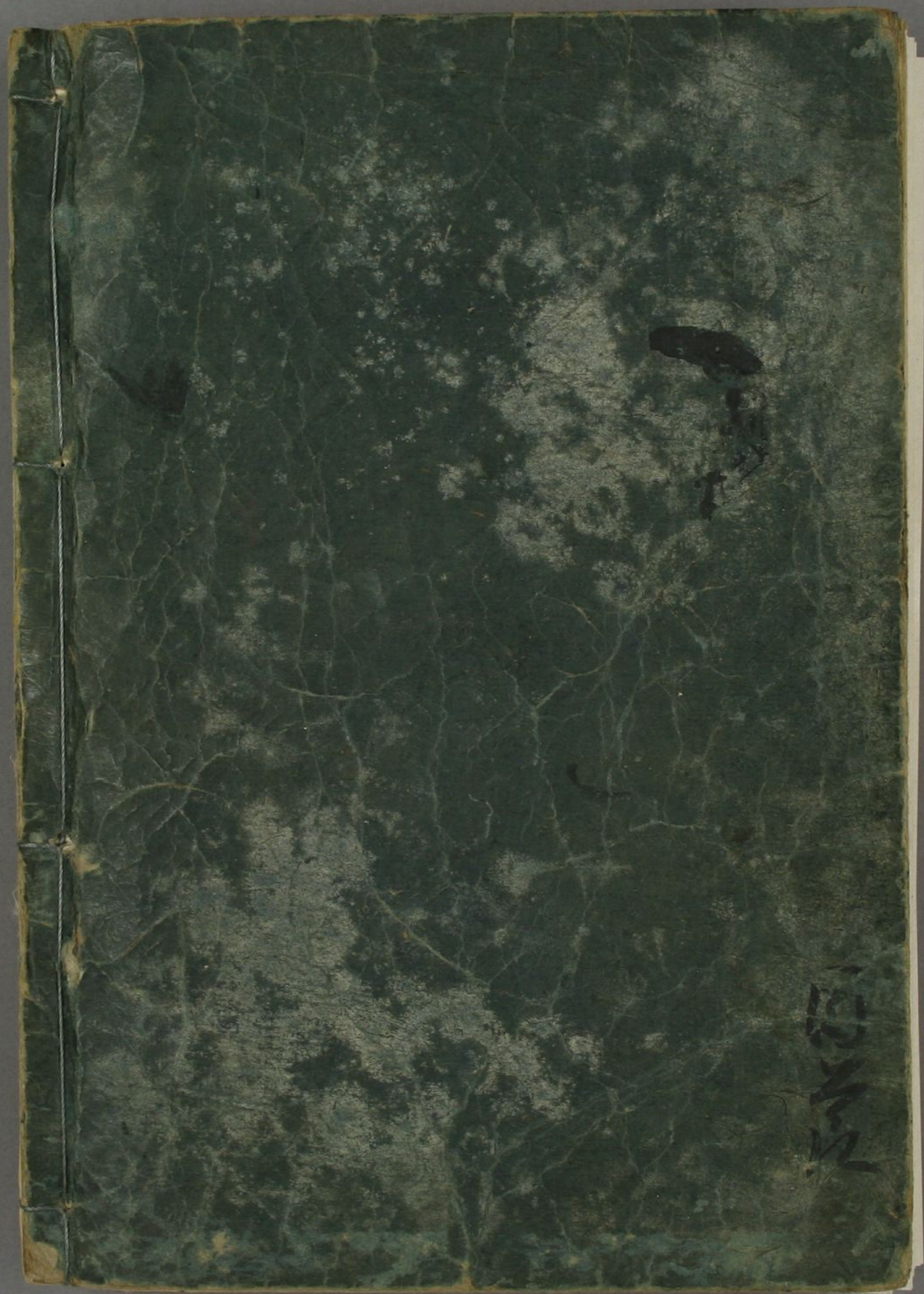
死か望とのふたは木此詠の場

中

自量

家してはよ新れ詠とよ此海

去詠



1824